

# 因島みらい会議 中間報告

2050年「日本一住みよい島 因島」  
実現に向けた歩み

開催期間：2024年7月～2025年11月

全14回開催

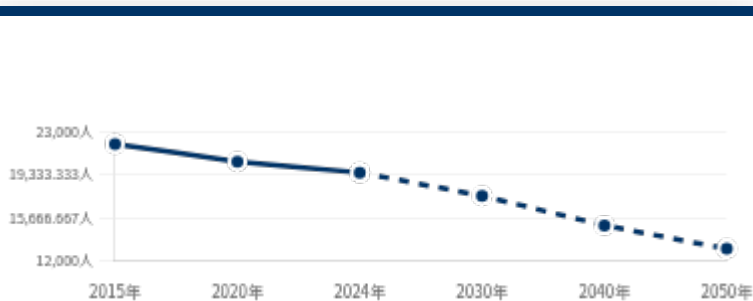
主催：因島商工会議所



# 『因島みらい会議』の目的

## 長期ビジョンを作成し、地域活性化を可視化すること

### 数値が示す危機



- 人口：20,345人(H27比▲6.9%)
- 2050年予測：約13,000人(▲36%)
- 年間出生数：推定40人前後
- 高齢化率：45%(尾道市全体より高い)
- 2026年：病院統合で病床数▲37%削減
- 住宅地地価：年▲2.1%下落継続
- 外国人住民：1,441名  
(人口比7%、全国平均2.5%の約3倍)

### 構造的な課題

- 基幹産業（造船業）の人手不足  
→外国人労働者が既に不可欠
- 若者流出の実態  
→商業利便性が限定的で若い日本人労働者の流入は期待できない
- 医療・福祉の危機  
→2026年病院統合で救急医療体制の懸念
- 商業施設の限定性(島嶼部特性)

### 会議の行動指針

- ①データを直視する
- ②外部に学ぶ
- ③住民ぐるみで考える



# データが示す"現実"と、私たちが描く"未来"

## 現状の厳しさ (推定値)

- 安心度 (推定65~75位相当)病床▲37%、高齢化率45%
- 利便度 (推定70~85位相当)商業施設限定的、大型店困難
- 快適度 (推定58~65位相当)人口減▲6.9%、下水道課題
- 富裕度 (推定50~58位相当)地価は尾道市全体の58%、年▲2.1%



因島エリア独自調査による推定順位 (参考値) 推定60~75位/92市 (中国・四国)

### ⚠ 推定順位について

因島エリア単独の公式ランキングは存在しないため、尾道市全体データ (中国・四国92市中47位) と因島固有データ (人口動態・地価・医療施設等) を組み合わせた推計値です。あくまで現状把握のための参考値としてご理解ください。

## 数値に表れない価値

- ◆瀬戸内海国立公園という唯一無二の自然環境
- ◆村上海賊の歴史遺産と文化的アイデンティティ
- ◆犯罪率の低さ・穏やかな生活環境
- ◆造船業を核とした技術集積
- ◆外国人住民1,441名との共生実績 (人口比7%)



## 描く未来 (2050)

### 日本一住みよい島：因島



### 【会議の3つの使命】

- ①2050年ビジョンの策定
- ②幸福度(Well-being) 指標の開発
- ③多文化共生因島モデルの構築

(例)



# 2024年7月～2025年12月 活動の軌跡



2024年7月～10月  
第1～3回

会議の指針決定

「日本一住みよい島」決定



2024年11月～2025年3月  
第4～6回

住みよさ指標設計

三豊市視察実施



2025年4月～7月  
第7～10回

プロジェクト始動

日本語教室開講



2025年9月～11月  
第11～14回

ワークショップ設計

多文化共生モデル構築

# 活動の転換点：三豊市視察から得た3つの示唆



## 【なぜ三豊市だったのか？】

- 三豊市（香川県）も人口減少・高齢化に直面
  - 「父母ヶ浜」ブランディングや若者参画で「ランキングに頼らない魅力づくり」に成功
- 視察日：2025年3月26日

## 【学び → 因島への応用】

- |                          |   |                    |
|--------------------------|---|--------------------|
| ① 情報発信の戦略性<br>(父母ヶ浜の成功)  | → | SNS・高校生参加型PR動画の制作  |
| ② 若者が集まる仕組み<br>(トークスペース) | → | カジュアルトークスペース構想     |
| ③ 補助金依存からの脱却<br>(自走モデル)  | → | ふるさと納税活用、ベンチプロジェクト |

★ 最大の学び：「長期ビジョン策定と並行して、  
今すぐできることを始める」

# ビジョン達成のための3つのテーマと始まった活動


【2050年ビジョン】  
「日本一住みよい島 因島」

しごと

 ふるさと納税活用


くらし

 まるごと因島日本語教室開始

 空き家活用・Gate計画


にぎわい

 ベンチ設置プロジェクト（サイクリスト）

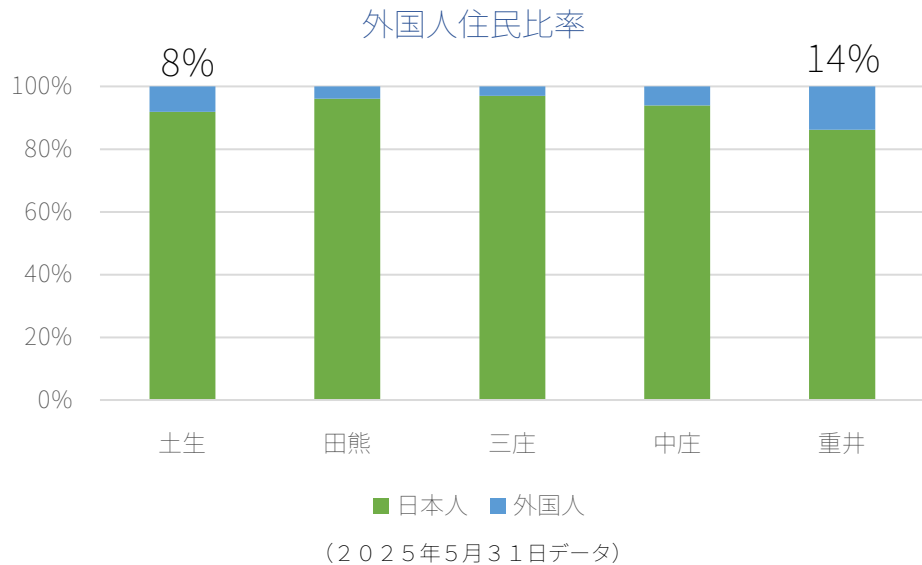
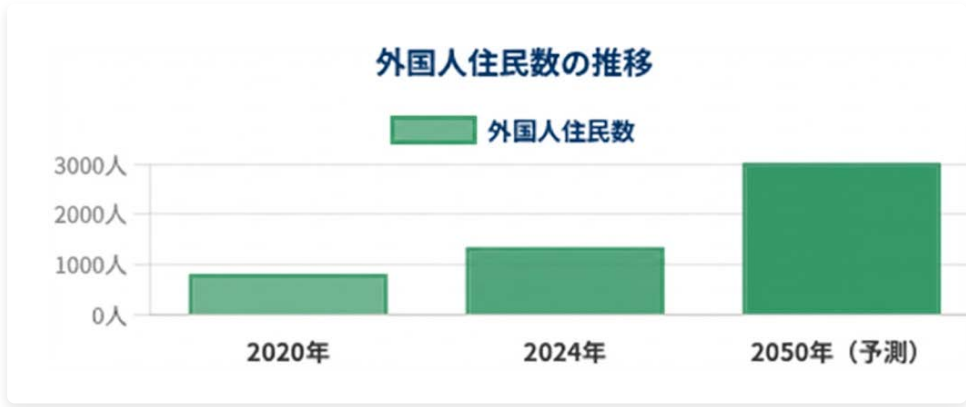
 アート×地域連携

 実施済み

 進行中

 検討中

# 因島は、すでに多文化共生社会の一步を踏み出している。



## ステップ1 現実の提示

外国人住民：1,441名

全人口の7% (全国平均2.5%の約3倍)

主な国籍：ベトナム、フィリピン、インドネシア、中国

雇用分野：造船、農業、介護、製造業

## ステップ2 構造的必然性

労働力不足の現実：年間出生数40人前後 → 次世代労働力確保は困難

若者流出の継続：商業利便性が限定的な因島では、若い日本人労働者の流入は期待できない

基幹産業の維持：造船・農業で既に外国人労働者が不可欠

## ステップ3 未来予測

2050年の人口構成(推計)

日本人：約10,000人

外国人：約3,000人(比率約23%)

## ステップ4 結論

多文化共生は国の方針とも合致した  
2050年の「生存戦略」である

「地域の必然性」+ 「国の基本方針」 → 「持続可能な未来」

- ・ 基幹産業(造船など)の維持・強化
- ・ 外国人材を含む働き手の受入れと定着
- ・ 人材育成
- ・ 地域経済の安定と競争力確保
- ・ 技能継承

# みらい会議（まるごと因島日本語教室プロジェクト）からのご提案

ボランティア・生活支援・交流

地域

因島モデル構築  
(3者協働モデル)

企業

まるごと因島  
日本語教室

現場語彙・協賛・従業員参加

場づくり・学習支援

企業の  
メリット

外国人労働者の離職率が下がる

安全管理（ヒヤリハット）が改善

日本人社員とのコミュニケーション円滑化

“人を大切にする企業”としてのブランド向上

地域の  
メリット

外国人とのトラブルが減る（言葉の壁の解消）

人口減少社会で“新しい仲間”が増える

地域活性化につながる

自治体からの評価・補助金の可能性

教室の

メリット

企業からの協賛で安定運営ができる

ボランティア参加で地域貢献ができる



短期

～2026年

土生教室、重井教室開始



中期

～2030年

地域活動参画率50%  
技術センターとの連携



長期

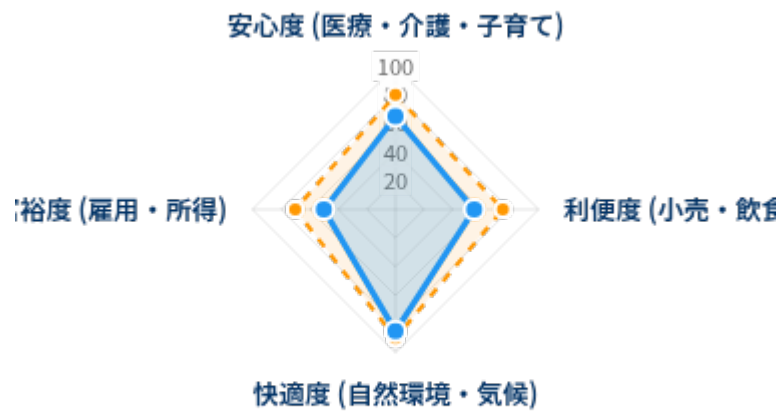
～2050年

言葉が通じる・学べる・技を磨ける島  
日本一住みよい島ブランド確立

# 「住みよさ」を測る指標づくり

## 4つの評価軸（例）

- 安心度: 医療・介護・子育て
- 利便度: 小売・飲食
- 快適度: 自然環境・気候 ← 因島の強み
- 富裕度: 雇用・所得



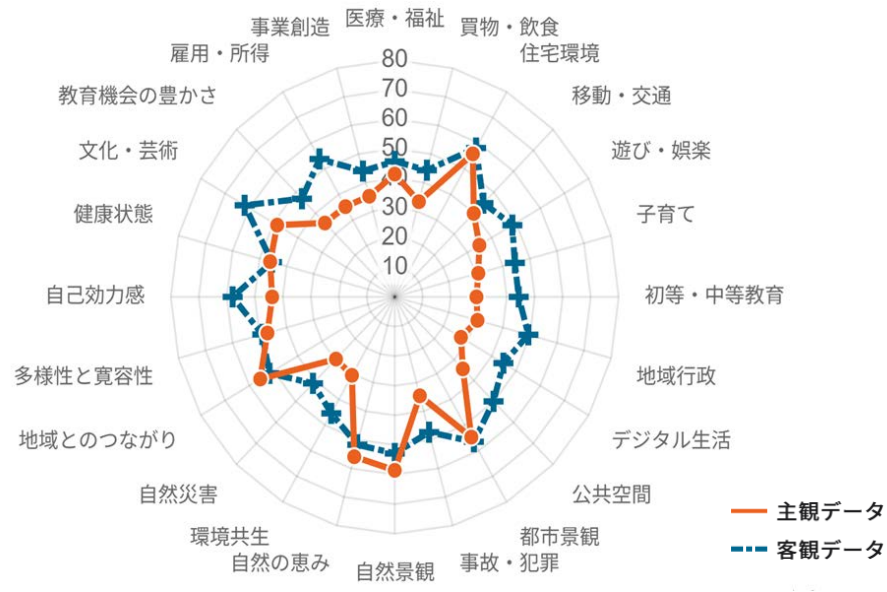
● 因島の現状評価 ● 目標値

東洋経済「住みよさランキング」指標を参考

## 地域幸福指標（例）

- 心身の健康・充実した状態
- 地域コミュニティの強さ
- 将来への希望・安心感

● 生活環境 ● 地域の人間関係 ● 自分らしい生き方



長期ビジョン達成  
を可視化するための因島指標





全員参加型指標づくり

2025年度版 Well-Being 全国調査（デジタル庁）：尾道市データ（106）

# 2025年度今後の活動予定

## 1) ワークショップ

**目的** 若者が自分事として描く2050年の因島

-  対象: 因島高校・中学生
-  テーマ: 暮らし・しごと・にぎわい
-  形式: 出前型・グループディスカッション
-  実施予定: 因島高校 2026年3月6日決定

## 2) 調査実施

**目的** 参加意識醸成・現状把握・幸福（Well-being）指標

-  対象: 住民・事業者
-  形式: 検討中
-  実施予定: 2026年3月予定

## 3) 多文化共生因島モデル【3者協働モデル】構築の検討